

足りなかったもの

旭川市立光陽中学校 三年 櫻井 壮二郎

「オン ユア マーク」

冷たく、激しい雨が容赦なくからだをうつ。秒速約八メートル。雨の速さと僕の速さ。降る雨の速さが全て同じではないように、走る速さも同じにはできない。練習のときに計ったタイム。理論上は、目標の全国大会参加標準記録に届くはずだった。あの日のあの時間に戻れるなら。どうしたらからだは思うように動いてくれたのだろうか。とてつもなく足が重く、一秒一秒が無表情に通り過ぎていった。

僕は陸上部に所属している。全道大会に備えて、自分のからだに向き合ってきた。部活の練習とのバランスを考えながら、筋トレをしてきた。筋力だけでなく、不足している柔軟性を高めるために、毎日ストレッチをした。食生活の改善にも努めた。大好きなお菓子を我慢した。(新聞の高体連の記事の中で自分と同種目で優勝した女子選手がお菓子を我慢していたと知ったからだ)

このように羅列してみると、自分で言うのも何だが、引退した今では信じられないくらいよく頑張っていたなと感じる。また、今年の会場は自分が普段の練習で使っている競技場だった。だから、長時間の移動も、ホテル生活も、道具が不足する心配も、何もなかった。練習通りの走りができれば、僕のからだは、できるはずだった。

どうしてだめだったのだろう。考えを巡らせているうちに、ふと養老孟司さんの言葉が思い出された。それは、からだは「身体」と「体」があり、「身体」の「身」は、身が入るとか身が入らないとか言うように、心の動きが伴った活動のことで、「体」というのは、ただの肉体であるというものだ。すなわち、「体」は空の器であり、そこに心の動きが加わると、「身体」となるようだ。

そういえば、「身に伴わない体」というのを経験したことがある。小学校最後の運動会直前に怪我をした。スポーツが大好きで、からだを動かしたくてたまらないのに、動かすことを制限された日々。そして治ってからは、からだを動かせることが当たり前だったときにはわからなかった喜びに気付かされた。

では今回は、「体に伴わない身」だったのかな、と自嘲気味に思う。最大限努力は

した。届くはずだったタイム。あまりに呆気なく終わりを迎えたのは、自分の身体の足を引っ張ったからだろう。自分より外側のレーンにいるから見えてしまう予選一位通過の選手。体温を奪っていく激しい雨。自分の中では緊張なんてしていなかった。でもそれは、身が既に諦めていたからではないか。自分の体を信じていなかったからではないか。今になって、そんな思いが渦巻く。

優れた選手は、フォームなどを無意識で作れるようになるらしい。しかし自分はその域には達していなかった。無意識の中まで取り込めなかった。「身」と「体」。ばらばらになって、からだの中で迷子になっていたのかもしれない。

思い描いていたものとはほど遠く、早く訪れてしまった僕の夏のゴール。きっと、あの雨に僕は負けていたのだろう。気持ちも、速さも。体だけを鍛えても意味がない。身だけが先走っても意味がない。大事なものは、一つの「身体」として、それらが融合することなのだろう。

次にあの日のようなスタートラインに立つとき、僕のからだは無意識で走れる「身体」でありたい。